

烏
城

第一七〇号

岡山県立岡山朝日高等学校

宮廷舞踏の魅力を探る

岡山教育の日関連事業として、舞踏家としてヨーロッパ等で活躍し、また舞踏史の研究でも優れた業績を修められている湯浅宣子氏に講演をして頂いた。本校ダンス部と管絃楽部の生徒数名を参加させた形で、実技を交えた講演となった。

《生徒感想》

バロックダンス講習会を受けて

一年G組 平石 下夏

この講習会は、私にとって初めてバロックダンスに触れる機会だった。バロックダンスとは、ヨーロッパの宮廷で踊られていたダンスで、講師の湯浅先生はその研究をしながら、自らも華麗に舞う、素敵な方だった。そんなバロックダンスの第一印象はまさに、「優雅」の一言である。ステップはもちろん、それを教えてくださっている湯浅先生の雰囲気からもその優雅さが醸し出されていたように感じる。しかし、初めての私にとっては本当に慣れないステップで、右？左？重心が上がる？下がる？…と慌てふためくばかりだったので、優雅さなんてかけらもなかったと思う。一方湯浅先生は、姿勢もまっすぐ、余裕のある軽やかなステップを見せて下さり、まるで華やかなバロックダンスの衣装を着ているのが見えるかのようだった。

このバロックダンスはリズムのとり方が独特だった。もちろんバロックダンスの中にもいろいろなリズムがあると思うが、今回先生が取りと思う。湯浅先生、ありがとうございました。

二年B組 坂本 理紗

湯浅先生、先日はめったにない機会を頂くことができ、本当にありがとうございました。踊りに合わせて演奏するということは、今までになかったので、今回このような経験をさせていただいたことは嬉しく思います。ただ普通に演奏するのではなく、「どこが一番ヤマなのか」「盛り上がったあとのフレーズをどこにもって行くのか」等々を考えながら、普段とはまた違った、各時代の特徴を表した曲を演奏するのはとても難しかったです。時代背景には何かがあり、それによって芸術面はどう変わっていったのか、そして貴族内では何が流行ったのか・・・様々なことを学び、考え、感じることで、ますます音楽の幅が広がった気がしました。

楽譜を見て、演奏をする。ただそれだけのことで、作曲者の生きていた当時の社会の状況、作曲者の意図など、いろいろと知ることが、よりいっそう音楽を楽しめるのだと、改めて思いました。今回のこの貴重な機会の中で学んだことを心に溜めて、これからの自分に生かしていこうと思います。

上げられた中のある二つのリズムは、私にとってはかなり異色で、カワントの中に1と3と4といった具合でアクセントがある、というものが多かった。またその二つのリズムではアクセントをつける位置が違っていった。にも関わらず、二手に分かれてそのアクセントに合わせて手拍子をしていると、途中で所々アクセントの手拍子が重なるようになっていて、二種類のリズムがあふれる会場にもどこか一体感があるように感じられた。長い歴史のあるバロックダンスはこのようなおもしろみを追求しながら、発展していったのだからと思う。きっと知れば知るほど新たな発見があり、それに魅せられて先生は研究を続けていらっしゃるのだろうかと思った。

講演の最後には衣装の説明もしていただいた。始まった時からずっと先生の横に置いてあり気になっていた衣装は、どれも先生の手作りだとお聞きして本当に驚いた。まさか手作りとは思えないほどのボリュームがあり色も鮮やかで、さらにひとつひとつモチーフが違っていてもとても豪華な衣装だった。昔の文献を読み解いたり、自分のアレンジを加えたりしながら完成させるそうだ。先生の活動は本当に幅広いと感じた。

今回一緒に参加した友達も、やはりリズムのとり方が印象に残っていたようで、これからダンスの幅がもっともっと広がっていきそうだと話していた。私はこの講演を受けて、まず先生の姿勢の美しさと、足の運びのやわらかさに感動した。そして、積極的に学び、自らも実際に踊り、さらに衣装作りまで手掛けて、どんどんと新しいことにチャレンジしていく熱意をぜひ見習いたいと思った。バロックダンスはもちろん、ダンスの幅を超えた先生自身から学ぶことも多く、とても実のある時間を過ごせたと思う。今後の部活動、また私生活にも今回の講演で学べたことを生かし、先生の優雅さも少しは身につけられたら、

講師手記

「三月二日」

湯浅 宣子

毎年三月二日は朝日高校の卒業式である。二〇〇九年のその日、私は講堂の壇上に列席していた。隣にはPTA会長を勤めた実弟、私は副会長だった。かつて両親が作ってくれた黒い絵羽織にはじめて袖を通していった。今では見かける事がなくなったが、幼い頃の卒業式や入学式は、黒地に模様の入った羽織であふれた。黒絵羽の母親と手を引かれた私達が長い二つの列になって、小学校の講堂前に並び入学式を待つ光景は今も記憶に鮮明だ。

その夕、私は娘を伴い病院の父に卒業の報告に行った。父はもう口の動きだけで「おめでとう」と言うのがやっとなった。翌早朝、父は逝った。急に降り出した雪は偶然だが、父が呼んだように思えた。不思議な事はまだあった。父の通夜のため家を出る直前、見知らぬ男性から電話が掛かってきた。最初要領を得なかった話をゆっくり聞いてみると、三十六年前父がした二度きりの講義を県北から聞きに来ていて、今急にその記録が必要になった、というのである。

父という人はエネルギーの塊のような人だった。小説にでもなりそうな怒涛と熱血の人生を送り、戦中、戦後の混乱期と高度成長期を駆け抜けた。家族や周りへの気配りと影響力も絶大だった。

つまり私は、現在かかっている「西洋宮廷舞踏」の存在をはじめ「夢」みた時には日本で誰も着目していなかったその事に、幼い私

がなぜ強くひかれたのか、何の手がかりも、存在の確証も無いその事をなぜ何年も思い続けることが出来たのか、それはこの父と折り合わねばならなかった事と関係があるのか、ないのか、としばしば思うのである。愛情と共に思い込みも強かった父は、音楽やダンスを軟弱軽薄と嫌い、それに好みを示す私を厳しく叱り、否定した。無論今とは比べ物にならないほど、世間も西洋の音楽やダンスには理解がなかった。

すっかり回り道をして、踊りを始めるには肉体的にあまりにも遅い、という年になって私は偶然知り合った英国女性を通じて海外の情報を得た。矢も立てたままらず渡航し、そして本場の研究に出会った。

その時の衝撃はどうだろう。塵から投げ込まれたような、という大げさに聞こえるだろうか。長い間このダンスに思い焦がれ、情報を求めてあぐさしくし、得られたわずかな情報から想像していたのとは、全く違うものだったのだ。私は「もう、どうにもならない。」と思った。研究の深さと守備範囲の広大さはその端々を垣間見た十日間で想像できた。当時とにかく出来る事と思ひ、英国の本を取り寄せ独自に宮廷衣装を作っていたが、会話の勉強はしていない。一人ずつ異なる英語の発音には苦労した。しかも一種不思議な英国独特の習慣ですべてが進行する中、むしろ授業以外の時間にどう振る舞えばよいかわからず困った。

そんな中、主宰の研究者は私を自身の蔵書部屋に招き、一冊ずつ内容と出典を説明し、どの資料もコピーしていい、と言った。それから短い休憩時間に町の図書館に走っていき、わずかな時間でもコピー機にかじりついた。ある日老婦人が近づいてきて、「あなた、五〇ページ以上は規則違反よ！」としつこく怒るのである。英国の図書館ではそういうまじりがあった。「図書館の本ではない、版權も切れている。」

毎年二度ほど英国に滞在し、ある研究者と寝食を共にする。彼女の企画するステージで踊るのだが、その何週間かの間にはダンスや宮廷の時代について様々な意見交換をする。彼女はダンスの話をしたいベクトルの一人に私を挙げる。世界の隅、書類に埋もれた彼女の書斎やキッチンで、世界のごくわずかの人しか知らない事柄について、共に熱中して考えをめぐらす。互いのひらめきに促されさらなるアイデアが浮かぶ。ひらめきは知識と想像力の土壌から起こる。ひらめきは次へ進む原動力だ。

私は新しい事に向かう時、いつでもゼロからスタートできる。すべてゼロから開拓してきたのだから。クリエイティブイティは体の中から湧き上がる。いつでもゼロになれる事は私の誇りであり、ひそかな自信であるかもしれない。

父は晩年よく言った。「ダンスがあるからいいなあ。体にいいし、生き生きしている。」

人の道のりは決して長くはない。しかし短いようでも、長い目で見ると、向かってくる事や出会う事に対して、正直に、謙虚に、知恵を尽くして出来る限りをやってくだけだ。

心にすがすがしさを重ねていく事が、生きる真の喜びであり、強さである。

昭和48年朝日高校卒

平成23年図書館教養講座「宮廷舞踏の魅力を探る」講師

ウェブサイト <http://emclute.com/ywasa>

と口で説明しながらも、無視して作業を続ける私は汗だくで、彼女は私が泣いていると思っただけ。「勘違いだわ、ごめんさい、ごめんさい、」と平謝りに謝りながら去っていった。

ともあれ、それから十数年、技術を獲得するための厳しい英国通いに始まり、私の興味とダンスの世界は広がりが続けた。世界のあちこちでダンスを愛する人たちとのかけがえの無い出会いや偶然の縁が、起こりつづけた。私は思いもかけないほど、長い距離を短期間で歩いてきた。

日本文化を学ぶ西洋人が居る。たとえば「能」はどうだろう。私達はその努力に敬意を払うし、彼らの努力に値する自国の文化を誇りに思う。日本の文化を認める人が世界のかなたに居る事が嬉しい。でも、姿かたちも、生まれも、日本人にはなれない事を知っている。同じように、私がどんなに上手く踊っても、勉強を重ねて知識を得ても、絶対に彼らにはなれない事を私は知っている。資料の発掘も読みこなしも格段に不利だ。

この事は私の意識から抜けることはなく、それゆえ私はずっと謙虚である。彼らの伝統に食い込んで字ばせてもらっている、という気持ちを持ち続けている。研究や技術の獲得を通じて、何かになりたいのではない。ただただ、疑問を解明し、前に進みたいのである。掘れば掘るほど、新たな疑問や課題が湧いてくる。しかし、課題が途切れないう事が、たまたまなく良い気分であり、少し掘り進んだと思える瞬間が幸せである。

無目的に思える私の道は、私を常にすがすがしい気持ちにさせる。純粹に追求する、関わっていることに力を尽くす、その事によって、さらに興味ぶかい関連分野や、多くの人に私は出会う。さらなる学びの機会を得、人との共同作業に喜びをみいだす。